

海外便り

フレーゲの足跡を訪ねて 生誕 150 年

藤村 龍雄

「1998 年」のフレーゲ

1998 年はゴットローブ・フレーゲ (Gottlob Frege) の生誕 150 年にあたる。生地ヴィスマール市は、「この都市の最も偉大なる人」を顕彰すべく、一年を通じ、さまざまな祝賀行事を開催した。すなわち、同年 2 月 28 日に行われたライプツィヒ大学のローター・クライザー (Lothar Kreiser) 教授による記念講演を皮切りに、4 月にはエアランゲン大学のクリスチャン・ティール (Christian Thiel) 教授、7 月はカリフォルニア大学のハンス・スルガ (Hans Sluga) 教授と続き、フレーゲの誕生日である 11 月 8 日の夜、市民ホールで行われたレーゲンスブルク大学のフランツ・フォン・クーチェラ (Franz von Kutschera) 教授の講演をもって、一連の祝賀行事に幕を引いた。(この日は、他に一日中、記念行事が行われたが、それについては後に触れる。) 一方、これに呼応してイエーナ大学では、ゴットフリート・ガブリエル

(Gottfried Gabriel) 教授を中心とする「ゴットローブ・フレーゲ生誕 150 年国際コロキウム」が 11 月 4 日から 7 日の午前にかけて開催されることになった。

縁あって、筆者は、これらの記念行事のうち、11 月 6 ~ 7 日の二日間、イエーナでコロキウムに、

そして 8 日はヴィスマールの記念行事に、それぞれ参加した。おかげでフレーゲについて新事実を幾つか発見できたが、それだけでなく、かつての「旧東独」訪問は、私にとって極めて貴重な経験であった。以下にその幾分かを記して、会員諸氏のご参考に供したい。

「フレーゲ都市」イエーナ

フレーゲ・コロキウムのなかで私にとって最も興味深かったのは、研究発表の行われたツヴェーツェンガッセ 9 番地にある講義室に入った直ぐ右側の壁にフレーゲの胸像 (写真 1 参照) が掲げられていたことである。初めはそれとは気付かず漫然と眺めていたが、休憩時間に何人かがカメラを向けるのに引きずられ、注意してみると、胸像の下部に「FREGE」と刻まれていた。改めて講義室の反対側の壁に目をやると、果たせるかな「Fichte, Schelling, Hegel」の胸像が並んでいるではないか。あたかもフレーゲが一人、敢然と



写真 1
フレーゲの胸像

して、三人のドイツ観念論者に立ち向かっているかのごとくであった。

コロキウムそのものの内容は、ここで記すにはやや特殊すぎるので、一切省略し、かわりにイエーナで見聞した事柄のなかで特に印象に残っているものを書き記したい。

その第一は、東西ドイツの統一後、旧東独時代の教授の追放が行われ、それがどれほどの規模で行われたかを尋ねることは、さすがに憚られた、その後を旧西独出身者が襲ったことである。ガブリエル教授もその一人である。

第二は、六日の昼、二時間ほど、徒歩で行われた「フレーゲ・ツアー」である。このツアーの終着点は、教師時代のフレーゲが住んでいたフォルストヴェーク(現在は、イブラヒム通り)29番地の家であった。この家はかなりの高台にあり、その急な坂道をフレーゲが通勤していた(徒歩で?それとも何か乗物で?)かと思うと、俄かには信じ難い気分が襲われた。というのも、ギムナージウムの学生時代、フレーゲは病気で一年半ほど休学しているからである。もっとも一説によれば、彼は教師になってから、しばしば、ヴィスマールの生家からイエーナの住居まで歩いたとのことである。してみると、成人後のフレーゲは強健な肉体の持ち主になったのかもしれない。

フレーゲの主著『算術の基本法則』を出版したヘルマン・ポレ社の前にさしかかった折、「この社屋は、外装を改めて、目下売りに出されているところです」というガイドの説明に、参加者一行から何ともいえぬ溜息が漏れた。

イエーナについて語るからには、「ホテル・シュワルツター・ベア」に触れないわけにはゆくまい。ワイトゲンシュタインがフレーゲを訪ねた折に宿泊したホテルは、幸いなことに、今も往時の姿をとどめている。

最後に、これは六日の夕食会の席上耳にした話である。ただし、時間がなく自分の目で確かめられなかったが、イエーナの郊外にフレーゲを顕彰して、「Frege-Strasse」が設けられたとのことである。

「二度死んだ」フレーゲ

ティール、ガブリエルの両教授、それに妻と私の計四人は、七日の午後イエーナのザール駅でイ

ンター・シティに乗り込み、一路ヴィスマールを目指した。食堂車で夕食を済ませて戻ってみると、同じ車両に前述のクーチェラ教授夫妻が乗り合わせていた。まさしくガブリエル教授のいう「フレーゲ線」にふさわしいものになった。

八日の午前にはフレーゲ所縁の地を尋ねる「バス・ツアー」である。

ホテルを出た途端、見知らぬ若い男性から、「Professor Fujimura?」と声をかけられた。後に判ったことだが、彼はヴィスマール市の職員で、どうやらわれわれ二人の世話をとおせつかったようだ。驚きがおさまらぬうちに、今度は、「どこか見覚えのある」老人が一人つかつかと私の方へやってきて、「Frege!」と挨拶したのである。全く予期せぬこの出来事に、私は一瞬言葉を失った。私の隣に立っていたガブリエル教授もやはりこれには驚いたようだ。これも後に明らかになったことだが、ヴィスマール市はひそかにフレーゲの縁者と連絡をとり、彼等を今日の祝賀会に招いていたのである。先程の市職員といい、この企画といい、ヴィスマール市はやることがなかなか洒落ていて、心憎いばかりである。

ツアーの最初の訪問先は、フレーゲが最晩年を過した家であった。即ち、1918年10月1日にイエーナ大学を退官した後、家政婦 Meta Arndt と養子 Alfred を伴って移り住んだ家で、この家は、ヴィスマールの隣町パート・クライネン、ヴァルト通り17番地にあつて、現在も住居として使われている。この家で特に興味深かったのは、外壁に取り付けられていたフレーゲの記念牌の末尾に、『概念記法』の公理の一つが刻まれていたことである。ただし、文字はフレーゲのものとは異なる。(その上、左括弧が一つ多い。)ティール教授に尋ねたところ、この牌はミュンスター大学が作成したもので、記号の使い方もミュンスター学派の流儀になつたものである、とのことであつた。

話は前後するが、このフレーゲの「終焉の地」も今回の行事の共催都市で、われわれが彼の「終



写真2
フレーゲの墓地

の住処」を訪ねるのに先だち、簡素な歓迎会が催された。そしてこの席上で、件の老人が徐に、およそ次のような挨拶を行ったのである。自分は Christian Frege といい、五代前の父方の祖先とわれわれのフレーゲの四代前の祖先が同じで、この人はルター派の牧師である。現在「フレーゲ」を名乗る男性は86名、「旧姓フレーゲ」の既婚女性が19名、外に親類が19名いて、互いに連絡をとりあっている。さらに、一族に所縁の「フレーゲ通り」が、ベルリン、ライプツィヒ、イエーナ、それにヴィスマールと全部で四つに上る。(ただし、前の二つはわれわれのフレーゲのものではない。)

次にわれわれが訪ねたのはフレーゲの墓地(写真2を参照)で、これはヴィスマール市の東墓地にあり、墓地番号は360である。墓石には、「Hofrat Dr. Gottlob Frege, Professor a. d. Universitaet Jena, geb. 8. Nov. 1848, gest. 28. Juli 1925」と刻まれている。墓石の手前に飾られた花輪の左側のリボンには彼の生没年が、そして右側は「Die Hansestadt Wismar ehrt Gottlob Frege」と読める。

直ちに気付かれたであろうが、フレーゲの「死亡日」が通説の「26日」ではなく、「28日」になっている。これはどうしたことが。再度ティール教授に尋ねたところ、「28日」はフレーゲが埋葬された日で、石工がそれを死亡日と取り違えたのだとのこと。どこまでも不運なフレーゲではある。

「フレーゲ記念額」の除幕

午前のバス・ツアーはこれで終り、朝の出発地で解散した。妻と私は一行と別れてホテルへ帰ろうとしたところ、今朝ほどの職員が再び現れ、市長が昼食をご馳走したいので是非来てくれという。少なからず躊躇されたが、頑に遠慮するの礼を失すと思い、招待を受けることにした。この昼食会に招かれたのは、ティール、ガブリエルの両教授、クーチュエラ教授夫妻、それにクライ

ザー教授とわれわれ二人の計七人であった。ヴィスマール市側からは、(女性)市長 Rosemarie Wilcken 博士、市議会議長 Gerd Zielenkiewitz 博士、それにギムナージウムの教授(と思しき紳士)の計三人が出席した。

昼食会は、このようにごく小さく、いわば内輪のものであったが、その代わりとでもいおうべきか、終始心の温まる、実にアット・ホームな雰囲気であった。

その一例を上げるなら、ガブリエル教授が、「これからイエーナを Fregestadt にしようと思う」と発言したところ、市長はすかさず、「それは困ります。イエーナには Optikstadt という立派な名前があるではありませんか。Fregestadt

という名前はヴィスマールに下さい」と応じたのである。(拙稿の二番目の見出しに「フレーゲ都市」という表現を用いたのは、実は、こういう事情があったからである)。食事の席が大いに沸いたのはいうまでもない。

昼食会が催されたレストランは見るからに由緒がありそうで、スウェーデン国旗が飾られていた。私がこのことを口に出したことから、話は「フレーゲのナショナリティー」におよび、「フレーゲはスウェーデンの哲学者である」という、あるオランダ人論理学者の主張が話題になった。この主張は全

く根拠がないわけではない。ヴィスマールは長い間スウェーデン王の支配下であり、フレーゲの祖先も17世紀の半ばスウェーデンからドイツへ移住してきたのである。とはいうものの、フレーゲが生まれたのは、それから200年後のことである。彼をドイツの哲学者とみるのが、今では自然であろう。

午後も引き続き市内中心部の徒歩ツアーが行われたが、ハイライトは「フレーゲ記念額」(写真3参照)の除幕式である。額が掲げられたのは、ベッチャー通り2番地の「フレーゲの家」の外壁であるが、彼が生まれた当時の家は第二次大戦で空襲にあい、同じ番地にある現在のこの家はその後建て替えられたものであるという。

除幕式といっても大袈裟なものではなく、「生



写真3
フレーゲ記念額

家」の真向かいの歩道で市長とクライザー教授の短いスピーチだけという極めて地味なもので、いかにもフレーゲにふさわしいものであった。

市長は、この記念祝賀行事に参加した人々や公開講演を行った教授たちに対して型通りの謝辞を述べた後、挨拶をこう締めくくった。「フレーゲの仕事の意味をヴィスマールのすべての人が理解できるとは思わないが、それだけに、フレーゲがこの都市の生まれであるという事実を記憶しておくことは、いっそう重要なのである」。

私事にわたって恐縮であるが、このスピーチの中で、市長が、「日本からも参加者を迎えて光栄である」とわれわれに言及されたことを記さないわけにはゆかない。というのも、これは帰国後、何人かの方々から送られてきた新聞のコピーによって知ったのだが、おそらく市長のこの言葉によるのであろう、除幕式の模様を報じた翌九日の地元紙『バルト海新聞』に、「一組の日本人夫妻の出席により、フレーゲの業績の国際性が明らかになった」という記事に加え、「フレーゲ記念額を撮影する二人の日本人訪問客」という文を添えて、カメラを構えているわれわれの後姿の写真が掲載されていたからである。つまり、「日本人の参加」がそれほど大きな意味をもっていたということであり、それはまた、われわれの出席がはからずとも市長のスピーチの趣旨を裏書したということにもなるであろう。実際、ヴィスマール滞在中にわれわれを歓迎してくれる言葉に何度か接したことと併せて考えると、今回のヴィスマール訪問には、私の予想をはるかに越えて大きな意義があったのかもしれない。

夜の講演会にはまだ時間もだいぶあったので、

Susanne (Frege) Peyronnet 夫人の車に便乗して、「フレーゲ教授通り」を訪ねることにした。この通りが車で10分ほどの、ヴィスマール郊外の高層住宅団地内にあることは地図で容易に確かめられたが、いざその団地に着いてみるとなかなか見つからず、何人かの団地の住民にこの通りの表示板の所在を尋ねても、正確に知っている者は一人もいなかった。辺りがすっかり暗くなって、ようやく「Prof. -Frege-Str.」に辿りついた。

「新たな始まり」の始め フィナーレ

夜7時、祝賀行事の最後を飾るクーチュエラ教授の講演 その内容については省略する が市庁舎二階の市民ホールで開催された。講演に先立ち、サキソフォンとピアノの演奏が30分ほど行われ、会場がいくぶん華やいだ雰囲気包まれたころ、市長が挨拶に立った。

市長は、この一年間の啓蒙的な連続講演を振り返って講演者たちに再度謝辞を述べ、今日の講演会がフレーゲを顕彰する最後の機会にならないことを願うと言って、挨拶をこう結んだ。「今日をもって新たな始まりを始め、今後もこのような祝典やコンGRESを催し、さらに、ハンザ都市ヴィスマールがこの偉大なる天才をいつまでも記憶していくよう希望する」。

講演に続いて行われたシャンパン・レセプションが、文字通り、最後の最後を飾った。普段でもこれ程ハードに動きまわることなど滅多にない私はさすがに疲労を覚えたので、レセプションは早々に退席することにして、市長をはじめお世話になった方々にお礼を述べて会場を後にした。

(1999年12月27日)

ポーランドの夏

第11回「論理、方法論、科学哲学に関する国際会議」の印象

塩谷 賢

ウィーン国際空港の片隅に待つ飛行機を見たとき、「こいつは小さい。」とビックリした。40人くらいしか乗れないプロペラ機。どおりでウィーン クラクフ間の予約が取れなかったはずだ。そ

のおかげで2日間をN氏とともに呑み歩くことが出来たわけだが、

飛びあがるとすぐに一面の畑、畑、畑。ゆるい起伏を覆うようにして緑と茶色のモザイクが続い

ている。たまに見える道路は細く、車の姿は見えない。飛行機が高度を下げるともうクラクフ国際空港だ。滑走路の横に軍用輸送機が並んでいる。結構熱い。ウィーンは雨が降ったりして肌寒かったのに。

空港はまるで瀬戸内のフェリー待ち合わせ場のようだ。ポーランド通貨のズロチは持出しが出来ないで、ここではじめて両替する。窓口氏が官僚ふうにして緊張する。ドルからズロチに替えるとお札が増えて急に金持ちになったような気がした。町はどっちだろうと居合わせたタクシーの運転手に聞いてみる。英語が通じない！ドイツ語の単語を並べて値段の交渉。まあ、ガイドブック並みの値段でホテルまでいってくれるそうだ。

空港から町までの道は狭い田舎道であった。チラホラと家があり、たまに十数軒が繋がっている。昼日中なのに人の姿が見えない。少し広い芝生が続いていると思うと、右から路面電車が合流してきた。大きく開けっぴろげな交差点を渡るとすぐにホテルだった。こじんまりとした2階屋だ。ここのスタッフには英語が通じる。通された部屋は14畳ぐらいか。1週間あまり暮らすにはまあ快適そうだ。水は飲めそうに無い。ミネラルウォーターの小瓶はあるが、僕にはとても足りない。一々フロントに言うのも面倒なのでペットボトルを買っておこう。

まだ午後である。会議の場所であるヤゲロー大学の下見に行くことにした。さっきの芝生の向うにその建物があるようだ。行ってみると街路樹が生い茂る道沿いに続く広い区画のどん詰まりの古いビルである。昼は静かでもいいが、夜は街灯も少なく物騒だろう。どうも変だと思ってホテルに戻り、インターネットで情報を見なおす。なんと会場名が変わっているではないか。ウィーンの宿では接続が出来なかったから僕はずいぶん古いデータをみていたのだ。下見に行って良かった。

次は市中心部に行って見る。なんとホテルから3分で中心市街の外郭道路になっていた。劇的に感じが変わるのが不思議だ。目の前の公園の一角にヤゲロー大学の別の建物がある。古風な建築でなかなか雰囲気がいい。ここが会場か。いくつかのビルに分かれているので周りをぐるぐる廻って見る。最も古いビルの一部は11世紀の遺構だそうだ。今日は締まっているので見られない。まあいいや。

会議は17のセッションに分かれ、一週間に

渡って行われる。今回は自分の発表はない。渡された分厚いアブストラクト集を全部読む根性もない。招待講演もセッション毎に設定されている。あれ、重なってしまっているものもあるぞ。まあ面白そうなものをつまみ食いしようと思い、毎晩、翌日の見物コースを考える観光客のノリでタイトルと発表場所と時間をチェックした。

結局、セッション9「論理、数学、コンピュータサイエンスの哲学」とセッション10「物理学の哲学」の発表中心に様々なものを聞いた。結論から言うと内容的にあまり印象深いものは無かった。「どうしてこんな話を今ごろまじめにやってんだ？」というようなものもあった。一方、クラクフが会場のせいか、ポーランド、ハンガリーなどの中欧の研究者の発表が多いことが目を引いた。自然科学を文学や政治学などの文脈、装置を応用して検討、批判するというよりも科学の装置の中に入り込んでその進展に寄与する精神的インパクトを与えようとする、古き良き意味での科学哲学の雰囲気はかなり年配の研究者からもヴィヴィッドに感じられた。ハンガリーからきて相対論について発表した研究者にちょっと話しかけたが、とても良い感じであった。

もう一つ目を引いたことは、ヨーロッパ諸国から比較的若い研究者、大学院生が気軽に参加していたことである。発表内容は必ずしもエクセレントとは言えないが、みな自信に満ちた感じで発表していた。地続きであるためか、旅費が安く済むためであろう。様々な異なった人の前で発表する機会を得ることによって研究者としての自信と態度が育っていくのであろうか。日本の院生、若手研究者は国内外のあちこちの学会になかなか行きにくい。ひとつには旅費の問題が大きい。また自分の発表に「こんなんでいいんだろうか。格好悪くないか」と妙に構えたところがあるように感じられるのは僕の偏見だろうか。その意味では、自然科学系の学会や会議がやっているように student paper のコンテストをやって多少なりとも旅費援助をしてやると同時に paper の質を公認してやるといった方式をとり入れてもいいのではなかろうか。

大きな会議ではあるが、結局は個々の専門分野の中で纏まって話をしている。テクニカルな分野では研究者の交流が多いようだが、哲学の雑駁なテーマのセッションでは、積極的に知り合いを広めようという雰囲気ではない。クラクフ市長主宰

の歓迎パーティーでも、会議主催のフェアウェルディナーでも皆グループ毎に固まって話をしている。石黒さんが知り合いのヨーロッパの若い研究者達を見つけては飛んで行って元気に話している。野本さんがコンスタンツに居たところの同僚と歓談している。何人もの人をその場で紹介してもらった。ただ、全員の著作を読んでいるわけでもないで名前だけ知っていても話の接ぎ穂がない。特に偉い先生となると忙しいし、パーティであった東洋の若造のことなど々覚えてはいないだろう。論文を持って訪問するなりメールで送るなりして研究の上でつきあわなければ意味はない。

自分の発表がないと、こっちから無理やり話しかけられないかぎりポツンとひとり佇むことになる。イギリスからきた数学の哲学の若い研究者に話しかけた。彼は「集合論は数学の基礎としては成功していない」という趣旨の発表をしたのだ。集合論と計算機科学のことについていくつか話をするが彼があまり新しい話題を知らないので専らこっちが解説しているようなことになった。彼の発表の先にあるものはなんなのだろうか。

招待講演では G. Sundholm と Churchland 夫妻、S. Shelah が印象に残った。

Sundholm は命題概念についての歴史的考察であったが内容もさることながらそこでの J. Hintikka のやり取りが面白かった。論理に対する大きな見方の足元が両者の間でずいぶん違う。Sundholm は代数的だし、Hintikka は集合論的とでもいえようか。どっちが正しいという評論家的問題ではなく、自分が具体的に論理や数学の哲学にコミットするときにはどうするのだろうかとおもわず自問してしまった。

Paul Churchland の内容は彼が今まで著作で書いていることの概説の域を出なかったが、Fodor との対比に強調点を置いていた。それを実際に目の前で聞いていると、本当に新しい学問の基礎となる見方と対人論法的に議論している内容を分けて考えねばならない、という印象を持った。ある種の哲学的見解はそれが生じた議論の流れの中に置いて見ないと正確な評価は難しい。数学的な自然科学でも同じようなことはあるが、操作的な記号の部分は文脈に依存する程度がずっと低い。内容といわれる解釈に関わる部分をどう扱ったものかということを考えさせられた。

Patricia Churchland はハッキリした神経科学者(の応援団?)である。脳科学・神経生理学の

立場から今後10年で解決が期待される問題を挙げた。その解決がどのような内容として理解され受け止められるかはまた別の問題であろう。しかし、古来から哲学の大問題とされてきた時間や意志、記憶等の問題のある側面が具体的な操作の対象としてハッキリ固定化される可能性が出てきたことは知的興奮を誘うものである。やや当事者?として興奮しすぎているような気もしたが。

Shelah は現代モデル理論の開拓者であり、ほとんどの革命的アイデアを生み出した人である。ぜひ一度本物を見たかった。早めに会場で待っているとカウボーイハットにグリーンのチェックのシャツ、白い綿のズボン、銀縁眼鏡に皺の多いニコニコした楽しそうな小父さんが現われた。見ていてなんか楽しくなるような、目をひきつけられる人だ。講演時間になるとその小父さんが話し始めた。彼がシェラーだったのだ。内容は彼の最近の論文に関わる概念の解説であり、正確な理解には相当テクニカルな議論が必要である。にもかかわらず彼の話振りはとても自然で、テクニカルなもの後ろに彼が感じている何かについての理解がこちらに伝わってくるような感じがした。不思議な充実感がある。

全体講演は二つ、ワルシャワ大学の Wróblewski と生物学の J.M. スミスであった。ポレンスキーの講演は「まあ良いことを言うなあ」と感じたがあまり印象に残っていない。Smith の講演は closing lecture であったため、飛行機の関係で聞くことができなかった。

特別講演としてポーランドの SF 作家 Stanislaw Lem の話があった。Lem は僕の好きな作家の一人で特に架空の書評集『完全なる真空』がとても好きである。(最近翻訳を手に入れた『虚空』はまだ読んでいない。)講演は街中の古びた映画館で行われた。彼の肉声と同時に通訳が交錯し、聞き取りにくかった。僕の理解した限りでは、彼にとって自分の作品は科学的精神の彼なりの表現であり、広い意味での科学の一つの方法と考えているようである。

講演後、ヤゲロー大学の院生の通訳で彼への個人的な質問が為された。僕は「創造性ということ、自然科学、SF、哲学という各々の局面でどのように考えるか?」という内容の質問をしようとしたが、その説明を通訳と英語でやり取りしていたら、通訳が「難しくて分らん。」といて挫折した。そこで「SFにおける創造性についてどう考えるか?」と聞いたら Lem はニコリとませ

ずに「私は(SF)小説というものを全く知らない。」と答えた。やはり彼にとっては自分の作品は自然科学の一分枝であるという確固たる信念があるのだろう。

逆に僕は自分の考えていることをなんだと思っているのだろう。哲学の学会に所属しているから、哲学の雑誌に投稿しているから哲学者だ、というのはあまりにも寂しい。考えるということに関して、ジャンルと方法論ということについてスッキリしないものがいつも心に残る。

このことを考えると会議前に行ったオシフィエンツム(アウシュビッツ)のことが思い出される。アウシュビッツは不思議なところだった。20棟以上の堅固な建物が並び、その中にある収容者の夥しい量の遺品や遺髪、山、現在も残るガス室と隣接する死体焼却炉は直接に感情に訴える。が、僕には、ドイツ側の事務手続きの書類、収容者への給食や備品に関する詳細な帳簿、死亡者の克明なファイルなどの印象が強い。非人間的目的のための膨大な量の記録を見ると、事実の正確な

記述とはなんなのだろうか、と思う。

数キロ離れたビルケナウ(第2アウシュビッツ)の印象はさらに強い。アウシュビッツをはるかに上回る人々が死んでいった広大な収容所である。当時はむき出しの地面だったようだが、今は到るところに青草が美しく伸びている。陽光をいっぱい浴びた広々とした草原の中に薄黒いバラックがそこに残る。巨大な焼却炉の跡地は高い木立に囲まれており、鉄道線路だけが褐色の地肌を覗かせている。収容所の奥まった隅には焼却された人々の灰を投げ込んだ池がある。廻りは白樺の林だ。どこまでも広がる、あくまでも青い澄み切った空が圧倒的な大きさをもって覆い被さってきており、白い綿菓子のような夏雲が意外に早く飛んでいく。名も知らない鳥が高く低く鳴いている。あまりにも明るく美しいポーランドの夏の午後ピタリと嵌めこまれた絶滅収容所。そこには人間の持つ生々しさを完全に乾かしきった木乃伊が置かれているように思われたのだった。



会務報告

(1999.4.1 ~ 2000.3.31)

日本科学哲学会第9期理事会

第11回

日時: 1999年9月10日(金) 13:30 ~ 15:00

- 議題: 1. 学会誌の販売について
2. 『科学哲学』33巻編集委員長について
3. 第33回大会開催地について
4. 第33回大会実行委員長について
5. その他

International Association for
Law, Ethics and Science 主催国
際会議の後援について

第12回

日時: 1999年11月13日(土) 12:00 ~ 13:15

- 議題: 1. 総会の進行及び提出議案について
2. 会計報告について
3. 次期大会について

第13回

日時: 1999年11月14日(日) 12:00 ~ 13:20

- 議題: 1. 次年度の活動方針について

2. 学会誌の編集について

第14回

日時: 2000年1月15日(土) 14:45 ~ 16:15

- 議題: 1. 第32回大会について
2. 『科学哲学』33巻編集委員について
3. 第33回大会実行委員長について
4. 第33回大会実行委員について
5. 第18期日本学術会議会員の候補者及び推薦人について
6. 事務局費・雑費の計上について

第15回

日時: 2000年3月28日(火) 14:00 ~ 15:30

議題: <報告事項>

1. 懇親会基金について
2. その他

第18期日本学術会議会員候補者の資格認定について

<審議事項>

1. 理事会の定例化について

2. 事務局費の運用について
3. 学術的諸会議の後援について
4. 「ヒト胚性幹細胞を中心としたヒト胚研究に関する基本的考え方(案)」に関する意見募集について
5. 役員選挙について
6. その他
 - 『科学哲学』に掲載された自分の論文のフルテキストをホームページ上で公開することについて
 - 女性会員について

『科学哲学』32巻編集委員会

第3回

日時:1999年6月12日(土)15:00~16:00

- 議題:1.『科学哲学』32巻1号の編集報告
2.『科学哲学』32巻2号の編集経過報告
3.その他

2名のレフェリーのコメントが異なる訂正(あるいは矛盾する訂正)を求めるものであったときの対応について
32巻2号に掲載する訂正文について
校正時の訂正について

第4回

日時:1999年9月10日(金)15:00~16:00

- 議題:1.『科学哲学』32巻2号(1999.11発行予定)について
2.『科学哲学』33巻1号(2000.5発行予定)の編集について
3.その他

「ニュースレター」No.14について

『科学哲学』33巻編集委員会

第1回

日時:2000年1月15日(土)16:30~18:00

- 議題:1.『科学哲学』33巻1号(2000.5発行予定)について
2.『科学哲学』33巻2号(2000.11発行予定)の編集について
特集テーマについて
依頼論文について

- 書評について
サーヴェイ論文について
3.その他
次回編集委員会について

第2回

日時:2000年3月28日(火)15:30~16:20

- 議題:1.『科学哲学』33巻1号(2000.5発行予定)の製作進行状況について
2.『科学哲学』33巻2号(2000.11発行予定)の執筆者について
3.その他
サーヴェイ論文について

第32回大会実行委員会

第2回

日時:1999年6月12日(土)16:00~17:30

- 議題:1.第32回大会について
特別講演について
シンポジウムについて
ワークショップについて
プログラムについて
2.その他
第3回実行委員会日程について
研究発表募集締め切り期日について

第3回

日時:1998年9月10日(金)16:15~17:30

- 議題:1.第31回大会プログラムの決定
2.その他
発表者の審査について

第33回大会実行委員会

第1回

日時:2000年3月28日(火)16:20~17:45

- 議題:<報告事項>
1.シンポジウムとワークショップの申し込み状況について
<審議事項>
1.特別講演について〔12.2午後〕
2.シンポジウムについて〔12.2午後〕
3.ワークショップの企画について
4.その他
今後の委員会期日について
実行委員長の交替について



会計報告

【1998年度決算】

収入：前年度繰越金	1,620,073
学会費納入	2,179,724
大会参加費	88,000
学会誌売上	58,062
預金利息	1,099
合計	3,946,958

支出：31巻1号製作費	387,000
31巻2号製作費	391,930
ニューズレター製作費	58,500
第31回大会運営費	249,230
通信費	387,250
印刷費	109,600
消耗品費	1,675
委員会交通費	139,000
アルバイト代・手数料	54,620
小計	1,778,805
次年度繰越金	2,168,153
合計	3,946,958

【1999年度予算】

収入：前年度繰越金	2,168,153
学会費納入	2,000,000
大会参加費	100,000
学会誌売上	40,000
預金利息	1,000
合計	4,309,153

支出：32巻1号製作費	400,000
32巻2号製作費	400,000
『会員名簿』製作費	350,000
ニューズレター製作費	100,000
第32回大会運営費	250,000
通信費	450,000
印刷費	120,000
消耗品費	20,000
委員会交通費	200,000
アルバイト代・手数料	100,000
予備費	1,919,153
合計	4,309,153



学会・研究会予告

日本科学哲学会第33回大会

【期日】 2000年12月2・3日

【場所】 名古屋大学

日本哲学会第59回大会

【期日】 2000年5月20・21日

【場所】 立命館大学

科学基礎論学会講演会

【期日】 2000年6月17・18日

【場所】 慶應義塾大学

日本記号学会2000年度学術大会

【期日】 1999年5月20日・21日

【場所】 静岡県立大学

【詳細】 <http://www.tara.tsukuba.ac.jp:80/semiotic/> をご覧ください。

日本認知科学会第17回大会合同会議

【期日】 2000年6月30～7月2日

【場所】 静岡文化芸術大学

(〒432-8011 静岡県浜松市城北3-5-1)

【詳細】 <http://www.sccs.chukyo-u.ac.jp/jcss/> をご覧ください。

日本生命倫理学会第12回年次大会

【期日】 2000年11月3・4日

【場所】 旭川医科大学

【詳細】

事務局(〒108-8345 東京都港区三田2-15-45
TEL. 5765-6186)にお問い合わせ下さい

Association for Symbolic Logic Annual Meeting

Dates: 2000. 6. 3-7
Location: University of Illinois
Contact: Carl G. Jockusch, Jr.,
Mathematics, Univ. of Illinois at Urbana-
Campain, Urbana, IL 61801, U.S.A.
e-mail: jockusch@math.uiuc.edu

6th International Interdisciplinary Conference on the Environment

Dates: 2000. 6. 21-24
Location: Montreal
Contact: Kevin L. Hickey, Assumption
College, 500 Salisbury St., Worcester, MA
01615, U.S.A.
e-mail: khickey@assumption.edu
URL: <http://champion.iupui.edu/~mreiter/iea.htm>

LOGICA 2000

Dates: 2000. 6. 27-30
Location: Liblice Chateau (Central
Bohemia)
Contact: Petr Kolar & Vladimir Svoboda,
Institute of Philosophy, ASCR,
Jilska 1, 110 00 Praha 1, Czech Republic
e-mail: logica@inbox.cesnet.cz
URL: <http://www.flu.cas.cz/logica/l99dfpgraf.htm>

3rd International History of Philosophy of Science Conference

Dates: 2000. 7. 6-9
Location: University of Vienna
Contact: Michael Heidelberger
e-mail: Michael=Heidelberger@rz.hu-
berlin.de
URL: <http://hhobel.phl.univie.ac.at/wk>

1st International Conference on Computational Logic

Dates: 2000. 7. 24-28
Location: Imperial College, London
Contact : www.doc.ic.ac.uk/cl2000

15th Annual Computing and Philosophy Conference

Dates: 2000. 8. 10-12
Location: Carnegie Mellon University
Contact: CAP Conference, CAAE, 155
Baker Hall, Carnegie Mellon Univ.,
Pittsburgh, PA, U.S.A.
e-mail: sh4d@andrew.cmu.edu
URL: <http://caae.phil.cmu.edu/CAAE/CAP/CAPpage.html>

Kirchberg 2000. 23rd International Wittgenstein Symposium

Dates: 2000. 8. 13-19
Theme: Rationality and Irrationality
Location: Kirchberg, Austria
e-mail: kirchberg@buffalo.edu
URL: <http://wings.buffalo.edu/philosophy/kirchberg/>

2nd World Congress of Philosophy of Medicine

Dates: 2000. 8. 24-26
Theme: Humane Healthcare Sciences,
Technologies, Values
Location: Cracow, Poland
Contact: Prof. dr. Henk ten Have,
secretariat ESPMH, Dept. of Ethics,
Philosophy and History of Medicine,
School of Medical Sciences, University of
Nijmegen, PO Box 9101, 6500 HB
Nijmegen, The Netherlands



寄贈図書紹介

1999年4月1日～2000年3月31日

『日本物理学会誌 大学の物理教育』

日本物理学会

『大学教育学会誌』第21巻第2号(1999年11月)

大学教育学会

スティーヴ・フラー著(小林傳司、調麻佐志、川崎勝、平川秀幸訳)『科学が問われている』

産業図書



『科学哲学』バックナンバー在庫一覧

タイトル	定 価		
4 (1971年)	1,200円	20 (1987年) 意識・機械・自然	1,700円
5 (1972年)	1,000円	21 (1988年) 私 の同一性	1,700円
6 (1973年)	非売品	22 (1989年) 科学と反 - 実在論	1,800円
7 (1974年) 記号・情報・論理	1,300円	23 (1990年) 科学哲学の未来を問う	1,800円
8 (1975年) 行為の理論	1,300円	24 (1991年) 異文化理解の基礎	1,800円
9 (1976年) 様相論理学	1,300円	25 (1992年) 自然化された認識論	2,000円
10 (1977年) 心身問題と道徳	1,300円	26 (1993年) 科学的説明	2,000円
11 (1978年) 解釈とモデル	1,500円	27 (1994年) 量子力学と物理的実在	2,000円
12 (1979年) 言語と非言語	1,500円	28 (1995年) カオスをめぐって	1,200円
13 (1980年) 社会科学と哲学の間	1,500円	29 (1996年)	1,800円
14 (1981年) 論理とは何か	1,600円	特集1 デュエムの科学哲学の現代的意義	
15 (1982年) 科学哲学の展望	1,600円	特集2 サイバネティクス	
16 (1983年) 認知科学の哲学	1,600円	30 (1997年) 近代における科学と哲学	1,500円
17 (1984年) 合理性とは何か	1,700円	31-1 (1998年)	1,500円
18 (1985年) 志向性について	1,700円	31-2 (1998年) 生物学的説明	1,500円
19 (1986年) 言語理解	1,700円	32-1 (1999年)	1,500円
		32-2 (1999年) 医療の哲学に向けて	1,500円

購入を希望される方は、事務局宛ご連絡下さい。



事務局からのお知らせ

1. 日本科学哲学会第10期役員選挙を同封の公事書に記載されました日程で執り行います。会員各位には、期日までに投票をお願い申し上げます。
2. 2000年度分の学会費をお納め下さいますようお願い申し上げます。貴台の(今年度分を含めた)学会費未納分合計金額に相当する数字が、封筒表面のラベル右下に記載されていますので、同封の振込用紙にてお納め下さいますようお願い申し上げます。なお、「-」表示の方は完納となっております。



編集後記

このあいだ何人かのひとたちと話していたときに、「最近の若者」の科学離れということが話題になりました。たしかに言われてみれば、私の学生時代 1970 年前後に比べれば、哲学に興味をもつ学生の関心が、科学にかかわる問題を中心に動くということは、ずっと少ないように思えます。このことは、しばらく前にあった「哲学ブーム」でも同様でなかったのでしょうか。しかし、これは科学に限ったことではなく、政治でも何でもよいのですが、あるひとのうまい表現を借りれば、個人を越えた「大きな物語」への関心の低下という現象のひとつにすぎないのかもしれない。

それでも、「科学」という名称に、否定的であれ肯定的であれ、特別の感觸をもたない若いひとたちが増えてきているということは、「科学哲学」という名前をもつ分野に何の影響も与えないはずはないでしょう。

このニューズレターの編集を担当するようになってから四年が経ちました。といっても、いつもは締め切りぎりぎりになって誰かに原稿をお願いするという泥縄式で来たのですが、今回は、執筆の方のご好意でずいぶん余裕をもった形で出すことができました。どうもありがとうございました。

(飯田 隆)

日本科学哲学会ニューズレター No. 14 2000年5月20日

編集兼発行 日本科学哲学会

事務局 〒156-8550 東京都世田谷区桜上水 3-25-40 日本大学文理学部哲学研究室内
Tel. 03-3329-1151 (内線 4100)
Fax. 03-3329-9217 【宛名「日本科学哲学会」明記のこと】

印刷 文成印刷 〒168-0062 東京都杉並区方南 1-4-1